



予告 第13回寄贈品展「戦後80年 時をつなぐモノたち」

12月2日(火)～2026年2月21日(土) (冬季休館を除く)

2025年は、アジア・太平洋戦争の終結から80年の節目の年となりました。戦争体験者が少なくなり、戦争の記憶とともに15年戦争に関わる資料も失われていきます。

本展は、新たに31名の寄贈者から寄せられた資料を展示します。寄贈品の多くは、戦争体験者の遺品です。「後世の人たちに役立たせてほしい、伝えてほしい」という思いを込めてご遺族から寄贈されました。

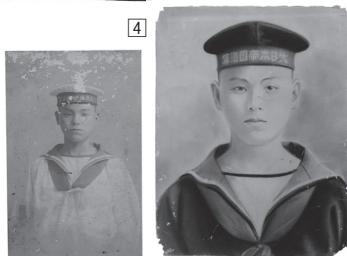
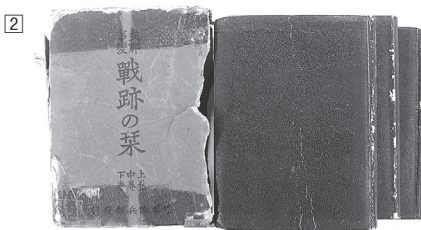
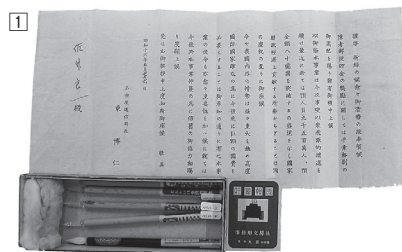
従軍手帳をはじめ、軍人挨拶必携、傷痕軍人手帳、軍事郵便や陸軍の兵士が使用した毛布やゲートルなどの実物資料は、軍隊生活の様子を知る手掛かりとなります。また、衣料切符、陶製水筒、名古屋空襲の罹災証明書や資材分譲領収書、大東亜戦争割引国庫債券、学童集団疎開先の写真などは、戦時下の市民の暮らしを伝える貴重な資料です。

今回は、日中戦争の主要な戦闘を記述した「支那事変戦跡の葉」、「中支を征く」などの書籍や写真も多

く寄贈されました。講演会「寄贈品から見る戦場」では、研究者の立場から寄贈品を交えてお話しをしていただきます。

特別コーナーは、これまでに寄贈された軍隊手帳に記載された軍歴に焦点を当て、戦地からの手紙も添えて展示します。

「時をつなぐモノたち」は、戦争の時代を振り返り、戦争の記憶を絶えることなく次の世代に伝えていく大切な役割を担っています。多くの方々にご覧いただきたいと思います。



- ①感謝状とガラスペン 貯蓄奨励策により、貯蓄の多い人に贈られた。
- ②支那事変戦跡の葉 戦地で戦う兵士に慰問品として配布された。日中戦争における戦闘が書かれており、火野葦平の記述もある。
- ③心臓防護板 トランプぐらいの大きさで、胸のポケットに入れて使用する。
- ④写真をもとに作られた肖像画 戦艦大和に搭乗し19歳で戦死した。
- ⑤シベリア抑留者が持ち帰った飯盒 蓋にロシア語のキリル文字で名前が刻まれている。

◆関連イベント

予約が必要です ☎052-602-4222

オープニングイベント

・2025年12月2日(火)

11:00から 3階展示室

寄贈品展の初日に、寄贈者を招い

てお話を聞きます。

講演会「寄贈品から見る戦場」

・2026年1月24日(土)

13:30～15:00 1階交流のひろば

・講師 広中一成氏(当NPO理事、愛知学院大学准教授)

日中戦争、その後のアジア・太平洋戦争に徴兵された兵士達の遺品が数多く寄贈されています。日中戦争の研究者である広中氏に、寄贈品からみた戦場はどのようなものかを伺います。

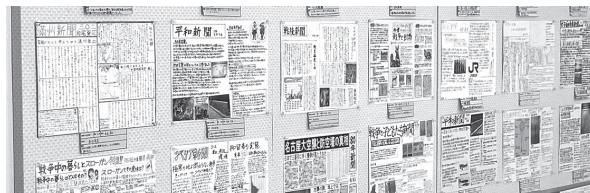
開催中 名古屋市立瑞穂ヶ丘中学校1年・3年生の平和新聞

11月15日～2026年1月31日

昨年に続く瑞穂ヶ丘中学生の平和新聞。今回は1年生と3年生の32点をプチギャラリーに展示しました。夏休みにピースあいちを見学に来た生徒さんたちが、それぞれテーマを決めて制作した力作です。

祖父の体験をより深く知ろうとする「満州新聞」／テレビドラマ「あんぱん」に出てきた戦争孤児を調べた「戦後新聞」／曾祖父が軍艦雪風の乗組員だったという「駆逐艦雪風新聞」／イラストで描いた「火垂る新

聞」はアニメ映画「火垂るの墓」を見て考えた。様々な着想と選んだテーマの動機が添えられて、戦争と平和を身近に引き寄せる工夫が凝らされています。



報告 「戦争の中の子どもたち」展 9月23日(火)～11月22日(土)

戦争中の肢体不自由児に関する報道や本を読んだボランティアたちから声上がり、今年は特別展示として学童疎開を取り上げることにしました。

学童集団疎開の実態は？

「学童疎開とは？」という疑問から始まり、いつから、どのようにして起こり、その実態は？と、次から次へと調べることが増えていきました。簡潔でわかりやすいパネルを目指し、詳しい年表は配付資料で補いました。

遠足気分を出発した集団疎開。その実態が、親と離ればなれになった子どもたちにとってはとても辛かったことが次第にわかってきました。自分の疎開先だった三重県のお寺を訪ね、81年前のその頃ののことをいろいろと思いだし、感慨深くなったと言われた語り手さんの記述もあります。

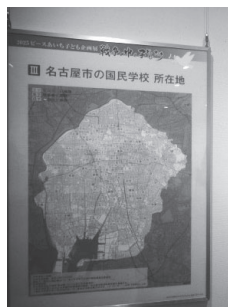
では、名古屋の国民学校はどこへ疎開したのか？地図に国民学校の所在地と疎開先を色で表しました。疎開先は愛知県内は赤色、三重県内は緑色、岐阜県内は紫色にしました。パネル化するまでには困難がありました。消滅した学校や、住所が何度も変更された学校があったからです。

障がいを持った子どもたちの学童疎開

障がいを持った子どもたちの学童疎開については、当時全国唯一の肢体不自由児のための公立学校であった東京都光明国民学校について調べました。

疎開先を学校自ら探さなくてはならず、ようやく長野県上山田村に決まったことや、その頃の給食の様子も再現して写真で表しました。また2階の映像コーナーで、光明国民学校の子どもの学童疎開の紙芝居「あんずの花につつまれて」を上映しました。

愛知県では県立盲学校や聾学校の子どもたちも疎開をしましたが、疎開先で空襲を受けたり、地震にあたりして再疎開を余儀なくされました。



◆関連企画

1.「秋の朗読会」 10月18日 1階交流広場



ピースあいち朗読の会「オリーブ」による朗読会では「せんそうをはしりぬ

けた『かば』でんしゃ」「『サヨナラ』がいえなかった」など8人の演者それぞれが選んだ作品を朗読しました。来館した「おとうさんは どこに」の作者がご自身の体験を話され、参加者は皆熱心に聞き入っていました。

2.講演会 「戦争の文化と子どもたち」

講師 西形久司氏 11月1日 1階交流広場



机いっぱい、古書店で求めたという『子供の科学』『週刊少国民』『少

年倶楽部』などを並べてお話に入りました。これらの雑誌を通して、大人の都合により、子どもたちがいかに戦争に巻き込まれていったかを時にはユーモアを交えて、時にはシニカルに話されて、興味をそられました。

報告 夏の企画展 2025年7月22日(火)～9月13日(土)

■「学び舎から戦場へ」

日本の未来を担うはずだった若者が、戦場へと向かうことになったのは何故なのか?その背景を解き明かすのが狙いでした。教育現場が戦争に巻き込まれていく経過を3つの大きなテーマを軸に取り上げました。

「愛知一中予科練総決起事件」

事件のあらましと、家族の反対を押し切り15歳で志願し戦死した鈴木忠熙さんの葉書や日記を読み解き、この事件が他校に波及していった様子も伝えました。

8月26日の関連イベントでは、朗読劇「嵐のあとに」の作者・馬場豊さんが、鈴木忠熙さんと家族のたどった道、遺族の戦後のお話をされ、「事件のことを正しく後世に伝えてほしい」と結ばれました。

「学徒出陣」

1943年10月21日、冷たい雨の降りしきるなか神宮外苑で行われた学徒出陣壮行会の模様は強烈な印象を与えました。学徒出陣に至るまでの経過を調べ、



当時、当然のように行われたこの風景に異を唱える者はいなかったのかと考えました。「どうか死なないでくれ」のパネルで、みなが賛成したわけではなかったことが分かりました。

「特攻」

特攻とは何か?から始まり、愛知にもあった特攻隊「草薙隊」を調べました。知覧特攻隊の生存者で、特攻の記録を残すために全国を奔走した父親のことを語り継いでいる板津昌利さんは、自分の行動は平和に結びつくと言っています。

8月30日に開催した『特攻のメカニズム』の著者・加藤拓さんの講演は満席で、講演が終わっても質問をしたい人の列が途切れませんでした。

■「戦後80年 戦争を語り継ぐー語り事業のあゆみ・これから」

「平和な時代を築くために、先の戦争のことを次代に伝えていく場所が必要」——多くの市民の願いから生まれたピースあいちは、戦争資料の収集・展示だけでなく、「戦争の記憶」も大切に伝えてきました。戦後80年の夏の企画展は、2007年の開館以来ずっと続けてきた戦争体験の語り事業を紹介し、今後を展望するものとなりました。

「語り事業のあゆみ」では、語り事業のはじまりから、「ピースあいち語り手の会」の発足(2009年)、「語り継ぎシナリオ」の作成など戦争体験者に代わってその体験を語り伝える方法を模索した時代(2012年～)、戦争体験「語り継ぎ手の会」の発足(2017年)、「語り継ぎ手の育成プロジェクト」の始動(2020



年～)を紹介。さらに、語り手や語り継ぎ手それぞれが、どんな思いから、どういう語りをしてきたかを具体的に紹介するパネルや、語りの際に使う紙芝居や絵、実物資料などを展示しました。

また、「語り継ぎシナリオ」や、今までに広く市民から募集して制作した6冊の「戦争体験談集」も手にとって自由に見ていただけるようにしました。

「今後の展望」については、懸案だった「語り手の会」と「語り継ぎ手の会」を一つの組織にすることを掲げました。

初めての試み

教員のための博物館の日 in ピースあいち

8月21日(木)

国立科学博物館と共催のこの企画は教員に博物館に親しみを持ってもらい、児童・生徒にもっと訪れてもらうためのものです。この日の参加者は7名でした。

当日は2時間のプログラムを組み、ガイダンスビデオを含むピースあいちの紹介、常設展示の案内、館内の資料と利用上の説明を、担当者がしました。その後、戦争体験語り手の松下哲子さんが満州からの引き揚げの話をしました。参加者が一番良かったのは、

松下さんのお話を聞いたことだといいました。今後生徒たちへ日々の授業や話の中で戦争のことを伝えていきたい、学校行事などにピースあいちの資料を活用できないか検討したいなど、先生方は、それぞれに思いを持ちお帰りになりました。お互いに交流できたらもっとよかったとの声もあり、その時間も含めさらに充実した内容をめざして、来年開催への模索が始まります。



報告

夏の
戦争体験語り
シリーズ
2025

8月1日から15日(土・日除く)、計11回開催。学校で案内を見たと10代の参加者も多く、語り手、語り継ぎ手のお話に耳を傾けていました。戦後80年、語り手は自らの体験とともに「平和を願う」想いを強く訴えていました。お話をボランティアがまとめました。

8月1日(金)「空襲体験と戦時下の暮らし」

お話 井戸早苗さん
(86歳)



終戦直後の名古屋の中心街はほとんどの建物が焼けて、名古屋駅から松坂屋が見えた。名古屋には東京と変わらぬ量の爆弾が投下された。三菱発動機をはじめ、多くの工場があったからです。私は6歳でした。両親は消火活動をしなければならず、「お前一人は必ず生き延びろ」と言われて、警報が響く中、冬の深夜の暗闇を現在の円上中学校の所にあった大防空壕に自分一人で逃げました。警報が解除され、「自分の家はまだあるかしら」と思いながら、人の髪の毛や体が焼けた臭いの中、下を向いて歩きながら家に帰りました。(村林)

8月2日(土)「1945年5月17日名古屋空襲」

お話 澄谷三八子さん
(87歳)



警報が鳴り、いつものように畑の防空壕に避難しましたが、近くの神社が燃えているのを見て、とにかく暗いところへと、母は私たち4人の子どもを連れて熱田神宮へと向かった。途中の内田橋は燃え落ちていて、対岸へ渡るため満員の船に声をかぎりに叫ぶ母。船に何とか乗せてもらえたが、焼夷弾が落ち火をふいた船がすごいスピードで近づいてきた。男性3人ほどで船の向きを変えて、なんとか対岸についた時には既に朝でした。焦げた豆を拾って食べつつ、堤防をずっと歩いて家に帰りましたが、水がめが飴のように溶け、鉄の釜が茶色に変わっていました。(栗田)

8月5日(火)「名古屋空襲・戦時下の暮らし」

お話 津田さあ子さん
(88歳)



国民学校1年生のとき、空襲で家を焼失。いつもモンペと防空頭巾を身に着け、降り注ぐ破片や火の粉から身を守る日々でした。当時、兵隊になることは名誉なこととされ、召集令状には逆らえず、裸での徴兵検査も行われた。学童疎開では親を恋しがり逃げ出す子もあり、寄生虫や食糧難にも悩まされた。津田さんは、自作の詩「大空襲の朝」を朗読された。そこからは戦争の恐ろしさと当時の情景がよみがえります。津田さんは親戚を転々とし、1945年8月15日、岩倉で終戦を迎えました。(加藤)

8月6日(水)「私のヒロシマ」

お話 佐々木陽子さん
(語り継ぎ手の会)



広島で被爆しながらも医療救護活動に携わった祖父。その祖父も間もなく倒れてしまい、亡くなるまでの看病のようすを、被爆を免れた祖母が克明に手帳に記していた。あふれる愛情、悲しみ、夫を奪われることへの慟哭、心の叫びが語られています。参加した小学生から「次の戦争はいつ起こるのですか?」と世界各地での紛争、戦争報道を目の当りにしての直球質問。「そんな世の中が二度とやってこないように、戦争の恐ろしさ、平和の大切さを語り継いでいます」と、佐々木さんが優しく子どもたちを見つめながら応えました。(熊本典)

8月7日(木)「満州開拓団」

お話 橋本克巳さん
(90歳)



昭和17年、6歳の時に開拓団の一員として中国東北部(満州)に渡った。黒竜江省に入ったが、一面雑草が生い茂る湿地帯。逃げ出す人もいた。その土地は中国の人達の血と汗と涙の結晶で、それを取り上げる私たちは侵略者だった。昭和20年8月17日を境にして、生殺与奪の権利が満州の人の手に。積年の怨みで日本人集落を襲撃してくる。狼に食い殺される人もいた。集団自決するか生き延びるか…。逃げる途中で、父母、きょうだいを全員亡くして、孤児になり、たった一人で日本に帰ってきました。(小田)

8月8日(金)「満州一奉天一引き揚げ」

お話 松下哲子さん
(91歳)



私は昭和9(1934)年、満州国で生まれた。父は当時の国策会社・満鉄に勤務。その国は昭和7年、中国東北部に日本によって建国された植民地国家であり、昭和20年8月15日、日本の敗戦と同時に消滅した。私は昭和16年、高千穂国民学校に入学した。17、18年までは戦争の影響を感じることはなかった。小学校も満鉄の社宅も暖房完備で水洗トイレ。冬はスケートを楽しんだ。昭和19年、兄が学徒出陣で出て行った頃から暖房(マイナス20度)が入らなくなった。数々の混乱がありましたが、家族揃って日本に帰ることができました。今、日本は戦争がなく素晴らしい国です。このことを大事にしたいと思います。(吉田)

8月9日(土)「キノコ雲の下で～家族の被爆体験」

お話 中上寧さん
(語り継ぎ手の会)



長崎へ原爆が落とされてから数日後、母は帰ってこない姉の夫を探すため、家族と共に長崎へ向かった。長崎市内へたどり着くと、火傷を負った人が橋にもたれて「たすけて～たすけて～」とうめき声をあげ、こちらでは目を失った馬があちこちへドーンとぶつかりながらよめいている、阿鼻叫喚の状況と化していた。火傷で真っ黒になった人々でいっぱいになった川を横目に姉の夫の勤務先へ到着し、夫をやっこの思いで自宅に連れ帰ったが、重症だった彼は息を引き取った。(不動野)

8月12日(火)「熱田・名古屋空襲」

お話 中野見夫さん
(86歳)



熱田区の実家・専光寺は空襲で亡くなった方の遺体安置所だった。けがをした人は本堂に寝かされていましたが、治療にあたっていたのは近所の目医者さん。遺体は境内に置かれていた。焼夷弾により焼けただけ、真っ黒になった人たちの姿や人の焦げる臭いは忘れられない。中でも上半身が無い幼子を目撃して強い衝撃を受けたことが、戦争体験を語る私の平和運動の原点となった。ウクライナ、ガザの惨状を見ると、子ども時代の戦争を思い出す。家族で平和について話し合ってほしい。「平和運動は家庭から!」。(桑原)

8月13日(水)「岡崎市に縁故疎開」

お話 高山孝子さん
(90歳)



終戦時は10歳だった。1945年、国民学校4年生の時に岡崎市に縁故疎開となり、岡崎市内が空襲を受けたのを疎開先から見ていた。いつ空襲が来ても逃げることができるように就寝時もモンペをはいたまま。食べる物がなかったのは本当につらかった。芋や南瓜などのお腹に溜まる物を食べていた。隣のお家で白米のおにぎりを食べているのを窓越しに見て、なんともうらやましく悲しかった。と、体験の絵を用いてのお話でした。この高山さんの体験を、「水彩画」にしてくれたまかべさんも参加されていました。

(丸山)

8月14日(木)「学童集団疎開」

お話 八神邦子さん
(90歳)



国民学校3年生の時、三重県に学童集団疎開した。子どもは次の世を背負う“宝”。でも、足手まといで“邪魔”でもあったんです。10歳の女の子の疎開先の様子は、親と離れて“さみしい”、食べるものがなくて“ひもじい”、ノミやシラミに血を吸われて“かゆい”という3つの言葉で具体的に紹介。何でも自分でやらなければならなかったこと、いじめっ子がいたことも。疎開が終わり名古屋駅に帰ってきても、親が迎えに来ない子たちもいました。“戦災孤児”“浮浪児”と言われて。最後に参加者全員に、これに乗って家に帰りたいと疎開先で折った【羽ばたく鶴】をプレゼントされました。

(赤澤)

8月15日(金)「名古屋空襲」

お話 森下規矩夫さん
(88歳)



私の家は今のバンテリンドームのすぐ近くにあった。1944年12月13日、防空壕に避難していたが頭の上から爆弾の炸裂する轟音に恐怖に耐えていた。小学校1年生の時だった。家はあっという間に焼け、中村区の叔父の家へ。そこにもまた空襲が襲ってきた。3月19日、低空で向かってくるB29から焼夷弾が降ってきて、田んぼに次々と火柱がたった。ひとりはぐれて立っていると、ワラに火が燃え移り明るくなって、母が見つけてくれた。戦争が終わって張り詰めた空気が、フッと変わった。何も咎められない世界。あの頃と違って、今は国民に主権がある。多くの人が反対すれば戦争にはならない。

(小松)

報告 「ピースあいち 戦争体験を語り継ぐ会」発足総会

2025年11月16日(日)

かねてより検討していた「語り手の会」と「語り継ぎ手の会」の統合について、両会事務局の努力もあり、いよいよその時期と判断し、会の名称、会則、活動基本方針、活動計画、事務局体制など具体的な検討を経て、発足総会を開催、約30人の関係者が参加しました。統合の経緯の紹介、活動方針・計画等の報告、渋井康弘理事(名城大学教授)の講話「語り継ぐ意味」の後、今後の活動について意見交換をしました。

「これからが本番、力を入れて伝えていかなければ」「平和を実現するために、命の限り語っていきます」「人の心を動かす語りができるよう努力していきたい」などの意見が出され、和気あいあい、明るく前向きな気持ちで会を終了しました。



次世代交流チームの戦後80年

2025年は次世代交流チームにとって、初めてにチャレンジした1年でした。メンバーが起案したロールプレイングイベントを3月と8月の学生の日で披露し、ピースあいちの戦後80年企画イベントとしても開催しました。学生の日を1年に2回おこない、かつ8月に開催したのも初めてでした。

「『ロールプレイで考えよう』～もしこの国に戦争が起こるとしたら～」は「新しい視点」が特に評価をいただき、大好評で

した。また、80年企画でおこなった際は、小・中学生向けに再構成し、来館された親子が平和について話し合える素晴らしいイベントとなりました。家族で話し合い、考えられる内容のイベントがピースあいちにとって「新しい視点」となり、これからの看板イベントにできたらと思っています。

チームにとっては、チャレンジを経て自信を深めることができた戦後80年となりました。



報告 夏休みを活用してピースあいちでボランティア&実習

今年も名古屋市立大学から7名(10日間)、愛知淑徳高校2名(3日間)、聖霊高校3名(3日間)が「ピースあいちの平和理念を学ぶとともに、平和な社会実現のために必要な異世代協働の価値と方法を学ぶ」「戦争のおろかさを後世に伝える方法を考える」などのミッションを持ち、ボランティアと交流を深めながら運営に参加してくれました。また、博物館実習には、5名の学生の参加がありました。



戦争体験談集第五巻を発刊しました

戦後80年にあたり戦争体験談を募集したところ59名の応募がありました。従軍、抑留、引揚げ、空襲、勤労動員、学童疎開、戦時中の生活など、「二度とあのような戦争体験をしたくない」「次の世代の人たちに同じような体験をしてほしくない」という強い願いをもって、子どもや孫など戦後世代に向けて戦争の実相を書いておられます。

また、ご家族が体験者の遺稿を寄せてくださったり、聞き取りをして原稿を作成してくださったりと、戦争体験の継承に取り組まれています。体験談集は多くの方に読んでいただけるよう、ご希望の方には販売します。

予告

ピース・クリスマスコンサートを開催します!

名古屋二期会アンサンブル研究会のメンバーが歌います!日本のうた・世界のうた・クリスマスソングから本格オペラまで。

とき 12月21日(日) 14:00(13:30開場)～15:30

ところ ピースあいち1階交流のひろば

参加費 無料(展示は閲覧できません)

定員 40名 要予約 TEL.052-602-4222

あいち平和のための戦争展に参加しました。

8月14日～17日/市民ギャラリー矢田・東文化小劇場
ピースあいちは「名古屋空襲展～軍需産業の昔といま」のコーナーで「名古屋空襲を知る一軍需産業の過去」のパネルを展示しました。また、17日にはピースステージで西形久司さんの解説による「しがみつki、燃え続ける(名古屋を消す)」の映画を上映し190人が参加しました。



シリーズ 平和を守る仲間たち②④ 戦争遺跡に平和を学ぶ亀山の会

私たちの会は「亀山九条の会」を母体に2018年に結成されました。市内の戦争遺跡や列車銃撃などの調査と発信をしています。

亀山市との協働事業で20年には「亀山市の戦争遺跡マップ」を発行し、24年には小中学生が使うデジタル平和教材を作りました。協働事業を通して亀山市の理解も進み、21年には「亀山市歴史的風致維持向上計画(第2期)」に戦争遺跡が盛り込まれ、「市の事業として今後10年で、主な戦争遺跡に説明板を設置する」と表明し、24年には第1弾として「関の地下工場」に説明板が設置されました。26年には第3回協働事業で「関の地下工場」の調査と「亀山市の戦争遺跡マップ」の改訂をします。

亀山列車銃撃については「かけはし2号」(10年)「同3号」(15年)で調査結果を発信してきましたが、

銃撃のあった8月2日に現場近くの中村公民館で、17年から法要を始め今年で9回目を迎えました。19年には中村公民館前に列車銃撃の説明板を市民の寄付で設置し、新たな犠牲者が判明した22年には内容を一新して立て替えました。今年さらに2人の犠牲者がわかったので3代目の説明板を検討しています。説明板を設置すると、戦争遺跡がなくても「戦争や平和を考える場」になることがわかりました。

毎年7月には市図書館でピースフェスタを開催して、調査結果を市民に公開するとともに平和を考える集いを企画しています。詳しくはウェブページをご覧ください。

<https://sensekikameyama.jimdofree.com/>

(世話人 岩脇 彰)



協働事業に向けて関の地下工場の事前調査



関の地下工場



亀山列車銃撃の説明板

ボランティアの窓

心を動かされた一冊

田中 玲子

私はピースあいちで戦争の語り継ぎ手をしています。本が好きでいろいろと読みますが、最近は戦争関連のものが増えました。新聞で紹介していた『父さんの手紙はぜんぶおぼえた』(岩波書店)は児童書で、オランダに住む10才のユダヤ人の少女がナチスから逃れるため、名前を変え、家族と離れて支援者の家で暮らす日々を書いた実話です。主人公の少女の心持ちになり、日々の出来事に一喜一憂しながら読みました。戦争の歴史は漠然として分かりにくいものですが、この本の少女の姿を通すと現実味をおび、この時代を生きた人々の想いに近づくように思います。戦争や平和を考える時、このように心が動かされることが大切だと感じた一冊でした。



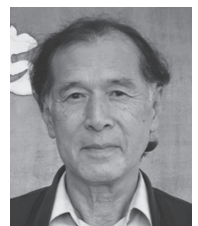
母の戦争体験

勝 実雄

私が平和のボランティアを行う動機は、母の戦争体験を少年期に聴いたことによります。

戦時中、母は名古屋市東大曽根に家族で住んでいました。無差別爆撃が激しくなると、近くの寺の境内の松の木に人の足や腕がぶらさがっていました。道路に横たわる死体を横目に逃げました。その時、走って逃げる男性の首から上が吹き飛び、その後1~2歩あるいてから倒れる光景を見たそうです。まさに狂気の世界です。そして、母は爆弾の破片が体内に入り意識不明となりましたが、九死に一生を得ました。これが戦争だと、今まで思い続けています。

戦争の悲惨さ、平和の大切さを次世代に伝えるため、微力ながら活動が続けたいと思います。



資料館探訪 42

ショア記念館 — フランス・パリ —

2025年7月4日、パリのショア資料館を訪れた。ホロコースト記念館である。パリ4区、都心に近く、マレ地区という流行の発信地の中にあるが、そこはひっそりと静かで、入り口では厳重な荷物チェックがある。

「名前の壁」にはホロコーストで亡くなったユダヤ人の名前が延々と記されている。歴史を背負って亡くなった人々を慰霊する展示形式としてよくあるものであろうが、その多さに圧倒される。次に印象的だったのは幸せだった時代の家族写真の展示である。戦争の悲惨さを示すために見るからに悲惨な写真を展示するのも必要なのかもしれないが、こうした幸せな写真はより想像力を掻き立てるように思う。そもそもおそらく被写体自身が「展示してほしい

写真」であろう。証言を聞き取るコーナーは、ホロコースト被害者はもとより、インタビュアーの若者たちの真剣さが未来への希望を感じさせた。

圧倒的な資料の量、洗練された展示、そしてそれに見入る静かな見学者たち。来て良かったと思わせる記念館であった

パリへ行くと美術館博物館好きの人は忙しい。ショア資料館が行きたい場

所のリストに載るのは珍しいとは思いますが、もし少し時間があれば、寄ってみることをお勧めする。無料である。

ちなみにすぐそばのカルナヴァレ博物館もとてもお勧め。高校の世界史資料集が好きな方は、そこに掲載されている多くの絵の実物を見ることができる。ここも無料。教育的な配慮であろうが、この料金設定は実に素晴らしいと思う。(MM)



月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン(無料)」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください!

新会員を大募集中!! 知人・友人にもお伝えください。

「ピースあいち」は、民営でボランティア運営でも、光熱費・固定資産税等で施設維持に年1200万円がかかります。他方で収入は、展示会などで来館された方の入館料(大人300円、こども100円)は、年100万円にとどきません。多額のご寄付や助成金がとても大きな助けになっていますが、毎年予定できるものではありません。最も頼りになるのは、会員の皆様からいただく年会費収入です。正会員6000円、賛助会員3000円です。いま、正会員が約330人、賛助会員は約430人。もっともっと増やしたいのです。

「ピースあいち」の活動に共鳴していただける方なら、どんなでも大歓迎です。電話・Fax 052-602-4222にご一報ください。クレジットカード、銀行振込で入会、寄付していただけます。



オンラインの
入会はこちら



オンラインの
寄付はこちら

【利用案内】

- 開館日 火曜日～土曜日
- 開館時間 午前11時～午後4時
- 休館日 日曜日・月曜日
年末年始休館 12月27日～1月5日
- 入館料 大人300円・小中高生100円
- 常設展示「愛知県下の空襲」「戦争の全体像・15年戦争」「戦時下の暮らし」「現代の戦争と平和」、準常設展示「戦争の中の子どもたち」「戦争と動物たち」。ほかに、図書や戦争体験動画のライブラリーもあります。
- 学校や団体の見学で展示ガイドや体験談を希望される場合は、事前にご相談下さい。
- 駐車場は2台分あります(300円)。他に障がい者用が1台分あります(無料)。

交通のご案内



●編集後記●

米国大統領と腕を組んで歩き、原子力空母「ジョージワシントン」上で大勢の在日米兵の歓声に応じて笑顔で飛び跳ねるのは、この10月に「ガラスの天井を打ち破り」誕生した日本初の女性総理大臣しかできない業でしょう。そして、前倒してGDP比2%水準に防衛費を増額し、「非核3原則」や「安保三文書」を見直して、防衛力を強化していくといひます。一方で台湾を例に「存立危機事態」に言及し、外交問題に発展させています。日本国民は、「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにする(日本国憲法前文)」ために憲法を確定したのに、縛られる側が改憲の発議をするともいっています。11月にピースあいち「戦争体験を語り継ぐ会」の発足総会がありました。その席でこういった話題は出ませんでした。みなさん危機感を持っているはずで、「明日の平和をつくるために、戦争の実相を語っていこう」と、強く手を握り合った思いでした。(AY)